

虹の架橋

今月の題字
宍倉淳一さん

(みどり市大間々町)

今年から、みどり市地域おこし協力隊として活躍する宍倉さんは、郷土を美しくする会、三方良しの会、富弘美術館を囲む会などにも積極的に参加している頼もしい仲間です。

虹の架橋を検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

ながめ余興場でオペラ

童謡ふるさと館で落語と対談
パルでカルテット・エスペラント

「童謡の父」と讃えられ、「うさぎとかめ」「花咲爺」「金太郎」の作詞家として知られる石原和二郎の「没後百年記念事業」が市内三施設連携公演で開催されます。

第一弾は十月一日、ながめ余興場でオペラ「和二郎物語」と「御代に花咲く」を上演。和二郎と同時代に生きた渋沢栄一、徳川昭武(徳川慶喜の弟)、森律子(日本の女優第一号)の知られざる物語を三人のオペラ歌手が演じます。



第二弾は、十月二十二日、和二郎

が生まれ育った東町の「童謡ふるさと館」で、真打・三遊亭楽麻呂師匠による「石原和二郎物語」と、「石原和二郎が生きた時代」と題して、松戸市戸定歴史館名誉館長で、大河ドラマ「晴天を衝け」の時代考証を担当した齊藤洋一さんと、安中市出身で筑波大学名誉教授の近代文学研究家・黒古一夫さんの対談が行われます。オペラ「御代に花咲く」と「石原和二郎が生きた時代」の対談をセットで聴くと、和二郎の生涯がいつそう興味深く感じられます。

第三弾は、十一月十二日、笠懸野文化ホール「パル」でカルテット・エスペラント十のコンサートです。出演は、みどり市立西小学校の校歌も作詞作曲したフルート奏者の荒川洋さんら六名。石原和二郎没後百年記念事業で行われた作詞コンクールで最優秀賞を受賞した神奈川県平塚市の高井良二さんの「かも」も荒川洋さんの作曲で紹介され、音楽物語「花咲かじいさん」も上演します。



いい話 (文責・菊) 《338》

百聞は一見に如かず 百見は一行に如かず

小耳にはさんだ
ネパールの寒村で単身で支援活動が続いているOKバジこと垣見一雅さんは毎月ネット上で「虹の架橋」を読み、ご丁寧な感想を寄せてくれます。そして、桐生に本部がある「OKバジ」を支援する会「OKS」を通して季節毎に活動報告が届きます。九月の報告書の冒頭には「今年には群馬での一大イベント(虹の架橋三百号記念OKバジ講演会)のお蔭で素晴らしい思い出をつくることができました。今手元にある数々の写真に懐かし

い思い出が詰まっています」と書かれています。そして、三つの支援報告が書かれています。
①足の不自由なティルクマリさんへセーターを五十一枚注文し、工賃として三万六千五百六十六円、約四万円を支払いました。これをして貧しい子供たちに支援をします。
②足の不自由なミンダゴ夫妻に学校の制服を注文、三百七十枚分、十五万四千四百五十六円を支払いました。これも村に運び、子供たちに支援をします。
③ランプールの市の眼科センターの門と塀の支援をし、ほぼ完成しました。支援金は三十万ルピーでした。

しい思い出が詰まっています」と書かれています。そして、三つの支援報告が書かれています。
①足の不自由なティルクマリさんへセーターを五十一枚注文し、工賃として三万六千五百六十六円、約四万円を支払いました。これをして貧しい子供たちに支援をします。
②足の不自由なミンダゴ夫妻に学校の制服を注文、三百七十枚分、十五万四千四百五十六円を支払いました。これも村に運び、子供たちに支援をします。
③ランプールの市の眼科センターの門と塀の支援をし、ほぼ完成しました。支援金は三十万ルピーでした。

た」と、写真付の報告をしていただきました。
垣見一雅著『からっぽがいい』の中に「百見は一行に如かず」という話があります。「支援する側は村人とは比較にならないほど恵まれた生活をしている。でも彼らの環境に、たとえ一日でも身を置き、同じものを食べて、同じ場で過ごすことで、彼らは心を近づけてくれる。少しでも目線が近づけば、彼らの悩みも問題も理解しやすくなる。町のオフィスでのコンピュータ管理だけで

は心を通わせにくい。見たり聞いたりしただけでは支援はわからない。行なってみて初めてわかる。自分に照らしてみれば、自分の恵まれていていることに感謝できる。そこから支援が始まる」と。
垣見さんから「真の支援とは何か」を教えてくださいました。支援の輪を広げたいと思います。



ティルクマリさんとOKバジ

経つ現在は沿線に十七の駅があり、大間々駅のプラットホームや上神梅駅の駅舎をはじめ、三十八の建物や橋、トンネルが国の登録有形文化財に指定されています。十七駅のうち十二駅が無人駅の各駅では、多くのボランティアの人たちが駅舎やトイレの掃除、花壇の手入れなどを行っており、沿線全体が優しさに包まれています。昭和レトロを感じる秋のわたらせ渓谷鐵道をお楽しみください。

世界一小さな 定利屋 トイレ美術館

今月の絵《338》

平田哲也さん『見えないところ』



福岡県柳川市の平田哲也さんが描く「癒しのてつちゃん地蔵カレンダー」が大好きで、寝室の壁には過去四年のカレンダーを並べ、過去のメモを見て、今日の実践に役に立っています。一昨年の九月のカレンダーには『見えないところを磨くほど、見えるところが光り出す』という言葉が書かれていて、トイレ掃除にも通じる言葉だと思い、コピーして仲間に配りました。一日一日がアツという間に過ぎていきますが一期一会の出会いや心に残る言葉などを書き留めておくだけでも、心が豊かになるような気がします。今年も残り三カ月となりました。

なごめ余興場で今年も「おわら風の盆」特別公演が開催された。総勢二十人が朝七時にバスで富山を出発、五時間かけて到着した。そのまま昼と夜の部の二公演も熱演。出口では「見送りおわら」を踊って来場者を喜ばせてくれた。
舞台設営に黒子の会の七人が朝九時に集った。音響、照明、舞台担当の松島弘平君が八尾の風情ある街並みと見事に再現。探し集めたススキも効果的だった。花道と横敷と中央の三方から、越中おあら節と三味線、朝子の演奏に合わせて男踊り、女踊りが登場すると万雷の拍手が沸き起こった。途中で踊りの講習があり、舞台上で踊り手が入り参内。男踊りは勇姿で、女踊りは指先まで優美だった。が、手を意識すれば足はかまわず、足を意識すれば手がかまわなくなった。観客が手を上げていた。口と氷ぐよりに踊っていた。

靖ちゃん日記

令和五年九月九日(土)
なごめ余興場で今年も「おわら風の盆」特別公演が開催された。総勢二十人が朝七時にバスで富山を出発、五時間かけて到着した。そのまま昼と夜の部の二公演も熱演。出口では「見送りおわら」を踊って来場者を喜ばせてくれた。
舞台設営に黒子の会の七人が朝九時に集った。音響、照明、舞台担当の松島弘平君が八尾の風情ある街並みと見事に再現。探し集めたススキも効果的だった。花道と横敷と中央の三方から、越中おあら節と三味線、朝子の演奏に合わせて男踊り、女踊りが登場すると万雷の拍手が沸き起こった。途中で踊りの講習があり、舞台上で踊り手が入り参内。男踊りは勇姿で、女踊りは指先まで優美だった。が、手を意識すれば足はかまわず、足を意識すれば手がかまわなくなった。観客が手を上げていた。口と氷ぐよりに踊っていた。

